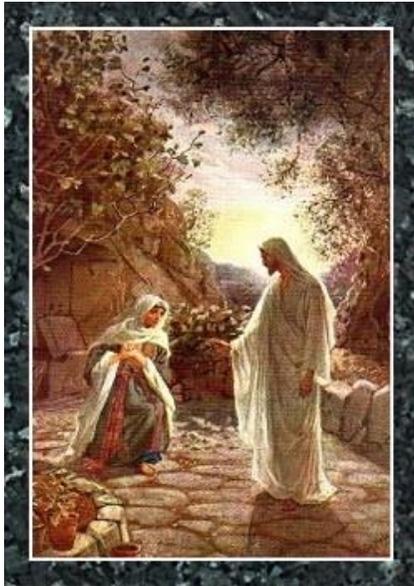


2020年4月12日 説教「よみがえられました」

マルコの福音書 16章 1-11節



キリストは十字架上で死んだ後、埋葬されました。それから三日目です。

1. 週の初めの日に墓に行った三人 (1~4節)

- ①三人の女性はイエスの墓に (1)「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った。」安息日とは土曜日。その日も終わり、かつてキリストによって救われたマグダラ出身のマリヤとヤコブの母とサロメとはイエスが葬られた場所に行って、亡骸に油を塗りに行こうとしていたのです。ヤコブとはアルパヨの子ヤコブで小ヤコブと言われます。つまり小ヤコブの母です。サロメとはゼバダイの妻と考えられます。彼らは油や香料を塗るために、墓に出かけたのです。イエスの埋葬の時に、香料を塗った後に、その体を亜麻布で巻いたと記されています (ヨハネ 19:40)。
- ②週の初めの日 (2)「そして、週の初めの日の早朝、日が上ったとき、墓に着いた。」そして、週の初めの日 (日曜日) の朝早くのことです。日が上ってきました。彼らはその場所に着いたのです。夜明け一番に、墓に着くように、彼らが歩いてきたことがわかります。日が上るさまは、今日と変わらないものでした。
- ③動いた石 (3~4)「彼女たちは『墓の入口からあの石をころがしてくれる人が、だれがいるのでしょうか』とみなで話し合っていた。ところが、目を上げてみると、あれほど大きな石だったのに、その石がすでにころがしてあった。」イエスの葬られた墓はアリマタヤのヨセフの所有していたものと思われ (ヨハネ 19:38)。墓は横穴形式で、ちょっとしたスペースがあり、そこに遺骸は安置されるのです。入口は大きな石で塞がっていて、簡単には中に入ることができません。ですから、女たちだけではその石を動かすことができるかどうかはわからず、「誰か開けてくれる人がいるでしょうか」と心配しているのです。ところが、いざ墓に着いてみると、あの大きな石がすでに開き、中に入ることができる状態になっていたのです。

2. 御使いとの対面 (5~8節)

- ①白い衣を着た青年 (5)「それで、墓の中に入ったところ、真っ白な長い衣をまとった青年が右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。」そこで女たちは、その墓の中に足を踏み入れたのです。すると、なんと真っ白な衣を着た青年が右側に座っていました。この青年とは御使いのことだと考えられます。マタイの福音書 28章には「主の使い」という表現がされています。マルコの福音書の記者マルコは、フレッシュな青年の雰囲気を持つ御使いを強調しているのでしょう。それを見て、女たちは大変驚いたのです。

- ②よみがえられました (6)「**青年は言った。『驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょう。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。』**さて、女たちが中を見渡してみると、どこにもイエスの遺骸がないのです。すると、青年は驚くべきことを伝えました。なんと十字架で死んで葬られたイエス・キリストは、復活したというのです。ここは確かに葬られていた所であっても、今はここにはおられないというのです。場所を間違えたわけではないことが確認されているのです。
- ③弟子たちへの伝言 (7~8)「**ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤに行かれます。前に言われたとおり、そこでお会いできます』とそう言いなさい。女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も動転していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。』**青年の言葉は続きます。それは弟子たちと、筆頭の弟子とでもいえるペテロへのものでした。それは、復活のイエスがガリラヤに行かれ、そこで会うことができるというものでした。女たちは動転してそこを出て、あとはもう何も口に出しませんでした。出来事が驚きを越えていたからです。

3. 復活の主との出会い (9~11 節)

- ① (9)「**さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現された。イエスは以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。』**小ヤコブの妻マリヤとサロメは先に帰ったのでしょう。復活の主が最初に会うことができたのは、マグダラのマリヤでした。この女はかつて七つの悪霊につかれていたというのです。彼女が遊女であったという説には証拠がなく、悪霊がかかっているとしか言えないようなやっかいな病気にかかっていたということは言えるかもしれません。しかし、イエスを通して癒され、主の近くにあつて奉仕をささげていたことは確かです。しかし、復活の主に最初に出会わせていただくとは、光栄の至りであったでしょう。それはただ主の恵みでありました。
- ②立証 (10)「**マリヤはイエスといっしょにいた人たちが嘆き悲しんでいるところに行き、そのことを知らせた。』**マリヤはその復活の主にあつた喜びを、弟子たちやイエスの近くにいた人々の所に行き、証したのです。
- ③信じようとしなかった (11)「**ところが、彼らは、イエスが生きておられ、お姿をよく見た、と聞いても、それを信じようとはしなかった。』**しかし、彼らは、イエスが復活して生きておられる、という証言を聞いても、それをにわかには信じようとしなかったのです。

《結論》 改めて、イースターおめでとうございます。コロナ感染のことがあって、すっかり暗い心になりがちだと思いますが、「おめでとうございます」という言葉を心から確認できるように、今朝の聖書箇所を深め、まとめていきたいと思います。

私たちはキリストの十字架と復活が、救いの根本的事実であることを認めている者達です。即ち、キリストの十字架が人間の罪の贖い、キリストの復活が人間の死からの解放としての永遠の命の保証であると信じています。しかし、キリストの復活について、私たちはどれだけリアルに受け止めているのでしょうか。

今、ここに出てくるマグダラのマリヤ、小ヤコブの母マリヤとサロメは、墓に出かけて御使いと思われる青年と出会い、主のよみがえりを告げられます。新約聖書の中で、御使いの御告げを聞いた人々は、ゼカリヤ、エリサベツ、イエスの母マリヤ、ベツレヘム郊外にいた羊飼いたち、使徒の働きの中にもペテロやコルネリオなどがいますが、復活の出来事でも、ここに出てくる女性たちが御使いからのメッセージを受けています。御使いに会った時には、皆が大変驚いています。今朝の女性たちも、「よみがえられたのです」と言われても、震え上がっているだけでした。でも、この恐れを持つというのは、大切なステップであるように思われます。受胎告知を受けた時の母マリヤも、当初恐れたのですが、その後の対話と御言葉を通して「お言葉どおりこの身になりますように」(ルカ 1:38) という告白にいたっています。

ここに出てくるマグダラのマリヤが復活の主に出会った時のことは、ヨハネ 20 章に詳しいです。泣き悲しんでいたマリヤに、主イエスが現れ、対話があった後に、主イエスが「マリヤ」と声をかけられた時に、彼女はようやくキリストであることがわかって「ラボニ」(先生)と告白しました。つまり主が復活されたことを心から認めることができたのです。後で、この出来事を弟子たちなどに証しても、彼らはなかなか信じることはできませんでした。彼らにはもう少し、時間が必要であったのです。

私たちはキリストの復活という情報について、聖書から教えられています。御使いからではありませんが、この情報を真摯に受け止めて、まずは驚かされるほどに、この現場に思いを寄せたいのです。そして、しばらくは黙考した上で、復活の主と呼びかけたいのです。そうです。復活の主よと呼びかけて、祈ることです。そして、マリヤのように、率直に思いや考えを伝えるのです。その時に主はあなたに何かを心のうちに、語ってくださるでしょう。そこにこそ、あなたが復活の主を確信できる出来事が生まれてくるのです。人がどうのこうのではない。あなた自身が主と向き合っていくのです。そこに、あなた自身が人格的に復活の主と出会うことが生まれてくる

のです。この主に出会う時に、あなたは救いを確信することができるのです。